來知德の錯綜說と王夫之の乾坤竝建論

金　東鎭

はじめに

來知德（一五二五～一六〇四）は、字は矣鮮、號は瞿唐、四川梁山（今重慶市梁平縣）の人で、明末の著名な易學者である。易學史における來知德の地位は、本田濟『易學』（サーラ叢書、一九六〇年）や戸田豐三郎『易經注釋史綱』（風間書店、一九六八年）といった易學史を概說した國內の研究書において、來知德のみが明代を代表する易學者として紹介されていることからも窺える。來知德の易學に關する著作には『周易集注』（一六〇一年刊）がある。[1]『四庫提要』は、來知德が（四川）萬縣の山中に籠もり易に沒頭すること二十九年にして完成したものがこの書であり、その易說は繫辭上傳の「錯綜其數」を基として易の象を論じたものであるという。[2]その易說が來氏の易學思想を代表する所謂「錯綜說」である。來知德の錯綜說は近世中國のみならず、朝鮮や日本にも大きな影響を及ぼしたものであるが、[3]それに關する國內の研究は極めて乏しいのが實情である。しかし、そのような近世易學史における來知德の影響を考慮すれば、來氏易學の研究は近世易學史の解明のためにも一考に値すると考えられる。本稿においてまず來氏の錯綜說を主題としたのは、その錯綜說が來氏易學の要とも言えるためである。

本稿で注目したもう一點は、明末淸初の思想家である王夫之の易學においてもその「錯綜說」が重要な意味を持つという點である。乾坤竝建論は王氏の易學を代表するものである。「乾坤竝建を以て宗と爲し、錯綜合一を象と爲す」[4]という命題は、易解釋における王夫之の第一綱領として有名なものである。また、王氏は『周易』における乾坤竝建論と錯綜說の關係を體と用の關係に譬えて說明する。これらのことから、王氏の易學において錯綜說が乾坤竝建論と密接にかかわる重要な理論であることがわかる。

高田淳氏は王夫之の錯綜說について、「錯綜とは漢易にいう旁通卦（錯）と反對卦（綜）であるが、單に漢易を援用したものではない」と述べている。[5]このような記述は、王夫之が自分の易學において錯綜說を驅使しながらも、來知德の名を一切擧げていないためであると思われる。しかし、漢易と王夫之の間には來知德の存在を考慮すべきではないかという疑問が殘る。それは漢易から始まる旁通・反對の概念に新しい意味を付與して最初に「錯綜」と名付けたのが來知德であるか

らである。朱伯崑氏は、錯綜説における來王兩氏の間の影響關係を示唆しているが[6]、明確な根據を提示してはいない。こういう狀況で、來王兩氏の錯綜説の比較は、易學における來王兩氏の關係の解明の一助となると思われるが、その比較はむしろ近世易學史における來氏の錯綜説の意義をより明確にする上でも缺かせぬものであると考えられる。

こうした考えに基づいて、本稿は來知德の錯綜説を主題として前代の易學からの影響及び漢易の類似技法とは相異なる來氏易學の理論的特色を明らかにする。續いて王夫之の乾坤竝建論における錯綜説の意味を考察し、來王兩氏の錯綜説を比較して兩者の類似點や相異點を明らかにする。これを通じて近世易學史における來氏易學の意義を窺いたい。

一　來知德の錯綜説

周知のとおり、明代の易學は程朱易學、つまり程頤の『易傳』と朱熹の『周易本義』に基づく義理易が主流であった。永樂帝の敕命により胡廣らが編纂した『周易傳義大全』はその代表的な成果である。それにより程頤と朱熹の解釋は正統的易解釋として認められ、明代の易學に大きな影響を及ぼした。しかし、來知德は義理のみを重視する從來の易學傳統に反對し、「象」を第一原理とする新しい易學理論の構築を試みたのであるが、その成果が『周易集注』である。その自序で來知德は次のように述べる（以下『周易集注』の引用の場合、書名を省略する）。

自王弼掃象以後、註易諸儒皆以象失其傳、不言其象、止言其理、而易中取象之旨遂塵埋于後世。本朝纂修易經性理大全、雖會諸儒衆註成書、然不過以理言之而已、均不知其象、不知文王序卦、不知孔子雜卦、不知後儒卦變之非。于此四者既不知、則易不得其門而入。不得其門而入、則其註疏之所言者乃門外之粗淺、非門內之奧妙。是自孔子沒而易已亡至今日矣。四聖之易、如長夜者二千餘年、不其可長歎也哉。夫易者象也、象也者像也、此孔子之言也。（中略）故象猶鏡也、有鏡則萬物畢照、若舍其鏡、是無鏡而索照矣。不知其象、易不註可也。

王弼の象を掃いて自り以後、註易の諸儒は皆な「象失其傳」（朱熹の言葉[7]）を以て、其の象を言わず、止だ其の理を言うのみ、而して易中の取象の旨は遂に後世に塵埋す。本朝纂修の『易經・性理大全』は、諸儒の衆註を會めて書を成すと雖ども、然れども理を以て之を言うに過ぎざるのみにして、均しく其の象を知らず、文王の序卦を知らず、孔子の雜卦を知らず、後儒の卦變の非を知らず。此の四者に于いて既に知らざれば、則ち易は其の門を得て入らず。其の門を得て入らざれば、則ち其の註疏の言う所の者は乃ち門外の粗淺にして、門內の奧妙に非ず。是れ孔子沒して自り易已に亡び今日に至る。四聖の易、長夜の如き者二千餘年、其れ長歎す可からざらんや。「夫れ易なる者は象なり、象なる者は像るなり」、此れ孔子の言なり。（中略）故に象は猶お鏡のごときなり。鏡有れば則ち萬物畢く照し、其の鏡を舍つるが若きは、是れ鏡無くして索照するなり。其の象を知らざれば、易は註せざるも可なり。

來知德は易解釋において象を斥け義理のみを追究する傳統が王弼から始まり、その傳統が當時科擧の基本テキストであった『周易大全』においても固く守られており、それにより「象」の傳統が一掃されたと考える。しかし、來知德は繫辭傳下の「易者象也」を根據とし

て「象」を易解釋における繫要な入り口とし、これまで受け繼がれてこなかった「象」の傳統を蘇らせようとしたのである。繫辭傳を含む十翼は傳統的に孔子の著作とされてきたので、繫辭傳の「易者象也」は象の傳統の復活における重要な根據となる。そして易解釋における象の意味をより明確にするために、來知德が注目したのが文王の序卦（六十四卦の配列）と孔子の雜卦傳である。

『周易』という書物は四聖の手を經て成立したとされてきた。來知德はそうした從來の說に從い、卦・卦辭・爻辭・十翼をそれぞれ伏羲・文王・周公・孔子の作とし、その中でも殊に『周易』成立における文王のもう一つの役割に注目する。それがすなわち六十四卦を今の順序に竝べたことである。來知德は卦辭と六十四卦の配列が文王という同一人物により行われたことに着目し、卦辭と六十四卦の配列に共通する原理を探ろうとした。文王と周公が卦辭・爻辭を付ける時にはその原理に基づいており、その原理が文王の序卦と孔子の雜卦傳に明らかに現れていると、來知德は考えたのである。その原理がすなわち「錯綜」である。

伏羲象男女之形以畫卦、文王繫卦下之辭、又序六十四卦。其中有錯有綜、以明陰陽變化之理。（自序）

伏羲は男女の形に象って以て卦を畫し、文王は卦の下の辭を繫け、又た六十四卦を序す。其の中に錯有り綜有り、以て陰陽變化の理を明らかにす。

このように「錯綜」とは文王の卦辭（周公の爻辭を含む）と六十四卦の配列に祕められている陰陽變化の原理である。來知德は文王による六十四卦の配列は卦象の「錯」あるいは「綜」に基づいており、錯綜の關係にある兩卦とそれらの卦辭・爻辭が密接にかかわっていると考えたのである。周知のとおり、易の六十四卦の配列に一定の規則が存在するという認識は昔からあった。唐の孔穎達は、上下反對の關係を「覆」、陰陽反對の關係を「變」と呼び、六十四卦において對になる兩卦の關係が覆でなければ變であるといった[8]。來知德は變・覆という六十四卦の配列原理を繫辭傳上の「錯綜其數」に基づいて錯綜と新しく名付け、自身の易學の根幹とする。來知德は『周易集注』卷頭の「易經字義」において、錯綜について詳しく解說している。まず、「錯」についてみよう。

錯者、陰與陽相對也。父與母錯、長男與長女錯、中男與中女錯、少男與少女錯。八卦相錯、六十四卦皆不外此錯也。天地造化之理、獨陰獨陽不能生成、故有剛必有柔、有男必有女。所以八卦相錯。（易經字義・錯）

錯なる者は、陰と陽と相對するなり。父は母と錯し、長男は長女と錯し、中男は中女と錯し、少男は少女と錯す。八卦相錯して、六十四卦皆な此の錯に外れざるなり。天地造化の理は、獨陰獨陽生成すること能わず。故に剛有れば必ず柔有り、男有れば必ず女有り。所以に「八卦相錯す」るなり。

「錯」とは、陰陽反對の兩卦の關係をいい、本卦と陰陽反對の卦を錯卦という。六十四卦の中では乾・坤をはじめ頤䷚と大過䷛・坎と離・中孚䷼䷝と小過䷽䷾の八つの卦が錯の關係である。この錯という概念は、說卦傳の「天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦相錯」に由來するものである。天地は乾☰坤☷の卦象であり、山澤は艮☶兌☱の卦象であり、雷風は震☳巽☴の卦象であり、水火は坎☵離☲の卦象である。來知德は「八卦相錯」を宇宙萬物の根源である陰陽の相對的關係を表した易の原理とし、それに基づいて

『周易』の上經が乾坤から始まり、下經が男女の交感の象徴とされる咸䷞・恆䷟[9]から始まる理由を説明する。

乾坤者萬物之男女也。男女者一物之乾坤也。故上經首乾坤、下經首男女。乾坤男女相爲對待、氣行乎其間、有往有來、有進有退、有常有變、有吉有凶、不可爲典要。此易所由名也。（自序）

乾坤なる者は萬物の男女なり。男女なる者は一物の乾坤なり。故に上經は乾坤を首めとし、下經は男女を首めとす。乾坤男女相對待を爲し、氣其の間に行（めぐ）れば、往く有り來る有り、進む有り退く有り、常有り變有り、吉有り凶有り、典要を爲す可からず。此れ易の由りて名づくる所なり。

「八卦相錯」の傳統的な解釋は重卦、すなわち八卦を重ねて六十四卦を作るという解釋であった。[10]そうした解釋は邵雍や朱熹にも繼承される。[11]その解釋において、錯は八卦の一つが八卦と交わるという「交錯」の意味である。しかし、邵雍は說卦傳のその文を根據として八卦を新しく配置した先天圖を殘し、朱熹はその圖を陰陽の相對的關係を表したものと解釋したのは周知のとおりである。「八卦相錯」を陰陽の相對的關係を表した易の原理とする來知德の解釋はそうした朱熹の解釋に由來するものである。續いて「綜」についてみよう。

綜字之義、卽織布帛之綜、或上或下、顚之倒之者也。如乾坤坎離四正之卦、則或上或下。巽兌艮震四隅之卦、則巽卽爲兌、艮卽爲震、其卦名則不同。如屯蒙相綜、在屯則爲雷、在蒙則爲山是也。如履小畜相綜、在履則爲澤、在小畜則爲風是也。（易經字義・綜）

綜字の義は、卽ち布帛を織るの綜にして、或いは上り或いは下り、之を顚し之を倒す者なり。如えば、乾坤坎離の四正の卦は、則ち或いは上り或いは下る。巽兌艮震の四隅の卦は、則ち巽は卽ち兌と爲り、艮は卽ち震と爲り、其の卦名は則ち同じからず。如えば、屯蒙相綜するは、（水雷）屯に在れば則ち雷と爲り、（山水）蒙に在れば則ち山と爲る、是れなり。如えば、履小畜相綜するは、（天澤）履に在れば則ち澤と爲り、（風天）小畜に在れば則ち風と爲る、是れなり。

「綜」とは、上下反對の兩卦の關係をいい、本卦の上下を逆さまにした卦を綜卦という。例えば、初爻から上を向いてみて屯䷂䷃となる卦象は、上爻から下を向いてみれば蒙䷃䷂になる。來知德はそうした兩卦の關係を、機織りの時に上下に動かして縱絲を整える「おさの働き」に譬えて「綜」と命名したのである。來知德は錯と綜の原理を用いて『周易』の上經三十卦・下經三十四卦の理由を說明する。

雖六十四卦、止乾坤・坎離・大過頤・小過中孚八卦相錯、其餘五十六卦、皆相綜而爲二十八卦、竝相錯八卦、共三十六卦。如屯蒙之類、雖屯綜乎離、蒙綜乎坎、本是二卦、然一上一下、皆二陽四陰之卦、乃一卦也。故孔子雜卦曰、屯見而不失其居、蒙雜而著、是也。故上經止十八卦、下經止十八卦。（自序）

六十四卦と雖も、止だ乾坤・坎離・大過頤・小過中孚の八卦のみ相錯し、其の餘の五十六卦は、皆な相綜して二十八卦と爲り、相錯する八卦と竝べて、共に三十六卦なり。如えば屯蒙の類いは、屯離に綜し、蒙坎に綜して、本より是れ二卦と雖も、然れども一たび上り一たび下りて、皆な二陽四陰の卦にして、乃ち一卦なり。故に孔子雜卦に曰く、屯見われて其の居を失わず、蒙雜わりて著わる、是れなり。故に上經は十八卦に止まり、下經は十八卦に止まる。

錯綜說に從えば、六十四卦の中で錯の關係にある八つの卦を除き、

殘りの五十六卦は綜の關係であり、この綜の關係にある兩卦を一つの卦で纏めて數えると、易經の上下がそれぞれ十八卦になる。來知德はこれにより、易經の上下における卦の數の不均等を解消し、『周易』の上下區分にも文王の序卦原理が現れることを明らかにしたのである。

『四庫提要』はその「上下經各十八卦」說を稅與權の舊說とする。[12] 宋の稅與權（字巽甫、魏了翁の門人）の說は稅氏の『易學啓蒙小傳』「後天周易序卦圖」（圖一を參照）とその圖說を通じて把握することができる。[13] しかし、稅氏の圖說は主に邵雍の說の引用とそれの敷衍であり、その稅氏の圖と類似した「序卦圖」が『六經圖』（宋の楊甲撰）にも載っている。[14] これらのことから「上下經各十八卦」に關する理解が稅氏

○圖一　稅與權「後天周易序卦圖」（通志堂經解本による）

以前にすでに存在し、殊に邵雍の影響を受けたものであることがわかるのである。[15] また、次の文からは來知德の錯綜の定義の由來を知ることができる。

錯綜是兩樣、錯是往來交錯之義、綜如織底綜、一箇上去、一箇下來。陽上去做陰、陰下來做陽、如綜相似。（曼淵錄、『朱子語類』卷七十五第四七條、一九二〇頁）

錯綜は是れ兩樣なり、錯は是れ往來交錯の義にして、綜は織るの綜の如く、一箇上り去り、一箇下り來る。陽上り去りて陰を做し、陰下り來りて陽を做すこと、綜の如く相似る。

朱伯崑氏も指摘したように、錯綜に關する朱熹の解釋は主に筮竹を操作して卦を求める過程に關わるものであり、[16] 六十四卦の配列原理としての意味は明確ではない。しかし、「おさの働き」という綜の意味が朱熹に由來することは明らかである。このように來知德の錯綜說は唐孔穎達の「非覆卽變」說・稅氏以前の「上下經各十八卦」說・南宋朱熹の「錯綜」說の影響を受けたものである。しかし、來知德は錯綜說を六十四卦の配列原理に限定せず、易解釋における重要原理として活用する。

周知のとおり、易の經文に現れる象の傳統的な解釋は、卦象について解說する說卦傳に基づく。しかし、說卦傳に明示される象だけでは、經文のすべての象を解說することができない。一例を擧げるなら、乾卦の龍・坤卦の馬といった象は「乾爲馬、坤爲牛、震爲龍（後略）」という說卦傳の記述では說明できないのである。漢代の象數易で用いられた諸技法は、概ね經文と說卦傳における象の隔たりを埋めるための工夫であった。[17] 來知德の錯綜說もそうした象のズレを解決するための手段である。まず錯を用いた解釋をみよう。

八卦既相錯、所以象卽寓于錯之中。如乾錯坤。乾爲馬、坤卽利牝馬之貞。履卦、兌錯艮、艮爲虎、文王卽以虎言之。革卦、上體乃兌、周公九五爻、亦以虎言之。又睽卦、上九純用錯卦。師卦、王三錫命、純用天火同人之錯。皆其證也。（易經字義・錯）

八卦既に相錯す、所以に象卽ち錯の中に寓す。如えば乾は坤に錯す。乾は馬と爲し、坤は卽ち「牝馬の貞に利し」。履卦は、兌艮に錯し、艮は虎と爲し、文王卽ち虎を以て之を言う。革卦は、上體乃ち兌にして、周公九五の爻にて、亦た虎を以て之を言う。又た睽卦は、上九純ら錯卦を用う。師卦の「王三たび命を錫う」は、純ら天火同人の錯を用う。皆な其の證なり。

來知德は説卦傳の象に基づき、文王の卦辭と周公の爻辭に現れる象がそれと相異なる場合に錯の原理を用いる。坤の卦辭の「馬」の基を錯卦の乾（説卦傳）とし、履䷉の卦辭「虎の尾を履む」の「虎」の基を履卦の下卦兌☱の錯卦艮☶[18]とし、革䷰九五の爻辭「大人虎變す」の「虎」も同じ例とする[19]。また、睽䷥上九の爻辭「睽きて孤なり。豕の塗を負い、鬼を一車に載するを見る。先に之が弧を張り、後に之が弧を説く。寇に匪ず婚媾せんとす。往きて雨に遇えば則ち吉」は「婚媾」の象を除き全ての象を上卦離☲の錯卦坎☵を用いて注し[20]、師䷆九二の爻辭「王三たび命を錫う」の象は專ら師の錯卦同人䷌を用いて解釋する[21]。

このように易解釋において陰陽反對の卦から象の根據を取る技法は、漢易の「旁通」に由來するものである。旁通の典據は乾卦の文言傳の「六爻發揮、旁通情也」である。東漢の陸績は「乾の六爻發揮變動して、旁く坤に通じ、坤來りて乾に入り、以て六十四卦を成す」と注して[22]、本卦と陰陽反對の旁通卦が相通じるとし、東漢の虞翻は本卦に無い象を旁通卦から引いて經文の解釋に活用した。續いて綜を用いた解釋をみよう。

如損益相綜、損之六五卽益之六二、特倒轉耳。故其象皆十朋之龜。夬姤相綜、夬之九四卽姤之九三、故其象皆臀无膚。綜卦之妙如此、非山中研窮三十年、安能知之。宜乎諸儒以象失其傳也。（易經字義・綜）

如えば、損益の相綜するは、損の六五卽ち益の六二にして、特だ倒轉するのみ。故に其の象皆な「十朋の龜」なり。夬姤相綜するは、夬の九四卽ち姤の九三なり、故に其の象皆な「臀无膚」なり。綜卦の妙は此の如くして、山中にて研窮すること三十年に非ざれば、安んぞ能く之を知らん。宜なるかな諸儒「象其の傳を失う」と以（おも）うこと。

來知德が綜に注目した理由は、綜の關係にある兩卦に同じ象が登場するためである。來氏が擧げている損と益、夬と姤はその代表的な例である。ここで來氏は共通する象だけを擧げているが、その經文を比較してみれば來氏が綜の關係に注目した意圖を理解することができるだろう。

損䷨六五、或益之、十朋之龜、弗克違、（後略）
益䷩六二、或益之、十朋之龜、弗克違、（後略）
或いはこれを益す、十朋の龜も違う克わず、
夬䷪九四、臀无膚、其行次且、（後略）
姤䷫九三、臀无膚、其行次且、（後略）
臀に膚无し、其の行くこと次且たり。

綜を用いて注した例をいくつか擧げると、豫䷏初六の「鳴豫」に、「謙䷎の上六（「鳴謙」）は、卽ち豫の初六なり、故に二爻皆な

鳴を言う」と注し[23]、未濟䷿九四の「震いて用て鬼方を伐つ、三年にして大國に賞せらるること有り」に、「未濟と既濟と相綜し、未濟の九四は卽ち既濟䷾の九三なり、故に爻辭同じ」と注した[24]。既濟九三の爻辭は「高宗鬼方を伐つ、三年にして之に克つ」とあるが、その內容は未濟九四の爻辭と同じく尙の聖王とされる武丁の北方征伐の事を指すという[25]。このように綜の關係にある兩卦に同一の象が登場する例は、綜を六十四卦の配列原理とみる來氏の錯綜說において重要な根據となるのである。

このように、易解釋に用いられた來氏の錯綜には漢易の影響が見られる。しかし、上述のように、來氏の錯綜說は六十四卦の配列と密接にかかわる原理であるので、單に易解釋の技法として用いられた漢易の旁通・覆象（反對）の繼承と見なすことはできないと考えられる。『四庫提要』は來氏が錯綜と共に易解釋に用いた「中爻」を漢易の互體說の繼承とするが、來氏の錯綜の由來については何も觸れていない。それは錯綜說における來氏の獨自性をある程度認めたものであろうと考えられる。特に覆象の場合は鈴木氏の指摘のようにその例がごく希れであり、漢代以後殆ど用いられていない[26]。そのために、來知德は綜を前人未發の原理とし、錯綜を孔子以後亡んだ象の原理の復活とする。こうした來氏の自負を『四庫提要』は「夜郎自大」に譬えて貶めるが[27]、來氏の自負にはそれなりの根據はあったと考えられる。來知德は錯綜說を文王の卦辭と六十四卦の配列に一貫する原理としながらも、それに止まらず、錯綜說を擴充して當時の易學の主流であった先天易を乘り越えようとする新しい易學の構築を試みたのである。

邵雍の先天易とは、『周易』の成立過程に新しい意味を付與して、文王以後に文字で表された今の『周易』を後天の易とし、易の原理がまだ文字化される以前の卦畫のみ存在した伏羲の易を先天の易とし、その先天の易が宇宙自然の變化原理をそのまま反映する本然の易であると强調したものである。そうした先天易の立場から考えると、文王・周公・孔子の易、つまり後天易は文字という不完全なる手段に依存するために、宇宙自然の原理をそのまま卦畫で表そうとした伏羲本來の意圖（作易本原精微之意）からはややずれているものとなる[28]。このように文字の傳達性に疑問を抱く先天易において、河圖洛書・先天後天圖のような圖象を用いて易の原理を表現し理解しようとする易圖學が重視されたのはまさにそのためである。

朱熹が邵雍の先天易と易圖を繼承し、易圖に基づいて先天易と後天易の原理を說こうとしたのは周知のとおりである。しかし、朱熹は伏羲の先天圖を陰陽の對待的關係を表したものとするのに對して、文王の後天圖（所謂「文王八卦方位圖」）についてはその原理を明確に說明できず、その八卦方位の典據となる說卦傳の「帝出乎震」條についてもその詳細を明かすことはできなかった[29]。來知德は易の兩義を各々錯と綜に當てはめることで、先天圖とは相異なる後天圖の原理を明らかにしようとしたのである。易の兩義とは「交易」と「變易」を指すもので、それは朱熹の定義に由來する。

陰陽有箇流行底、有箇定位底。一動一靜、互爲其根、更是流行底、寒暑往來是也。分陰分陽、兩儀立焉、便是定位底、天地上下四方是也。易有兩義、一是變易、便是流行底、一是交易、便是對待底。（黃義剛錄、『朱子語類』卷六十五第六條、一六〇二頁。「更是」、和刻本・朝鮮本・呂留良本は「便是」に作る）

陰陽には箇の流行するもの有り、箇の定位するもの有り。「一動一靜、互いに其の根と爲る」（「太極圖說」）は、更ち是れ流行する

ものにして、寒暑往來是れなり。「陰に分かれ陽に分かれて、兩儀焉に立つ」（「太極圖說」）は、便ち是れ定位するものにして、天地上下四方是れなり。易に兩義有り、一つは是れ變易にして、便ち是れ流行するものなり、一つは是れ交易にして、便ち是れ對待するものなり。

朱熹は易に變易と交易の兩義があり、變易は晝夜・四季のような陰陽の流行を意味し、交易は男女・天地・四方のような陰陽の對待を意味すると理解した。[30] 來知德はそうした朱熹の說を繼承しながらも、[31] それを錯綜說と結び付けて伏羲の易と文王の易を說明する。來氏は交易を錯に、變易を綜に當てはめ、錯は陰陽の對待を表した伏羲易の原理とし、[32] 綜は陰陽の流行を表した文王易の原理として、後天圖は陰陽の流行という綜の原理を表したものとする。この點において、變易を主に占筮法の原理とする朱熹の解釋[33]とは大きな違いを見せる。

此文王之易也。易之氣也流行不已者也。自震而離而兌而坎、春夏秋冬一氣而已。故文王序卦一上一下相綜者、以其流行而不已也。所以下經首咸恆。咸恆之交感者流行也。孔子繫辭剛柔相摩一條、蓋本諸此。蓋有對待、其氣運必流行而不已、有流行、其象數必對待而不移。故男女相對待、其氣必相摩盪、若不相摩盪、則男女乃死物矣。此處安得有先後。故不分先天後天」。（易經雜說諸圖・「文王八卦方位之圖」の圖說）

此れ文王の易なり。易の氣なるや流行して已まざる者なり。震自りして離にして兌にして坎なるは、春夏秋冬一氣なるのみ。故に文王の序卦の一いは上り一いは下りて相綜する者は、其の流行して已まざるを以てするなり。所以に下經は咸恆を首めとす。咸恆の交感する者は流行するなり。孔子繫辭の「剛柔相摩」の一條は、蓋し諸を此れに本づく。蓋し對待する有れば、其の氣運必ず流行して已まず、流行する有れば、其の象數必ず對待して移らず。故に男女相對待すれば、其の氣必ず相摩盪し、若し相摩盪せざれば、則ち男女は乃ち死物なり。此處に安んぞ先後有るを得んや。故に先天後天を分けず。

このように來知德は陰陽の對待と流行という易の原理を伏羲の錯と文王の綜に結びつけ、その二つの原理をそれぞれ表す先天圖と後天圖はどちらも廢棄してはいけないものとしながらも、錯綜における先後を認めず、そのために先天と後天の區分も認めないのである。[34] 來知德は錯綜の原理は離れて存在することができないものとし、新しい圓圖を作り陰陽の對待と流行の同時性を表そうとした。それがすなわち來知德の太極圖（圖二を參照）である。[35]

來知德において孔子の十翼は陰陽の對待と流行という錯綜の原理を敷衍說明したものであるが、その中でも來氏が最も高く評價したのは

○圖二　來知德の圓圖（太極圖）

序卦傳と雜卦傳である。六十四卦の順序に從って易の理を說いた序卦傳と錯綜の關係にある兩卦を一對にしてその對照的な義を說いた雜卦傳は、來氏において文王の卦序に祕められている錯綜の原理を最も明確に表したものであるからである[36]。特に來知德が序卦傳を聖人の書と認めない韓康伯以來の批判を、錯綜の原理を知らないものと强く批判したのは來氏が序卦傳の論理に拘らずその卦序の象に注目したためである[37]。「易象を悟り、文王の序卦、孔子の雜卦の意味を悟った」という『明史』列傳の評價[38]は來知德の錯綜說の特色をよく表していると思われる。

二　王夫之の乾坤竝建論

王夫之（一六一九～一六九二）は、字は而農、號は薑齋、衡陽（今湖南省衡陽市）の人で、明末淸初の思想家である。上述のように、乾坤竝建論は王夫之の易學を代表するものである。王氏の『張子正蒙注』太易篇に次のような記述がある。

周易竝建乾坤於首、無有先後、天地一成之象也。無有地而無天、有天而無地之時、則無有有乾而無坤、有坤而無乾之道、無有陰無陽、有陽無陰之氣（後略、二七六頁）。

周易乾坤を首めに竝建するは、先後有る無く、天地一成の象なり。地有りて天無く、天有りて地無きの時無ければ、則ち乾有りて坤無く、坤有りて乾無きの道有ること無く、陰有りて陽無く、陽有りて陰無きの氣無し。

乾坤竝建論とは、宇宙自然における陰陽二氣の不可分・無先後の關係に基づいて『周易』における乾坤二卦の竝存する關係を强調する易說である。王氏において『周易』が乾坤二卦から始まるのはまさにそうした陰陽二氣の緊密な關係を表すものである。乾坤竝建論に基づく王氏の易解釋は、相交わって存在する陰陽二氣の有り樣を明らかにしようとしたものに他ならない。

凡卦有取象於物理人事者、而乾坤獨以德立名、盡天下之事物、無有象此純陽純陰者也。陰陽二氣、絪縕於宇宙、融結於萬彙、不相離、不相勝、無有陽而無陰、有陰而無陽、無有地而無天、有天而無地。故周易竝建乾坤爲諸卦之統宗、不孤立也。然陽有獨運之神、陰有自立之體、天入地中、地函天化、而抑各效其功能。（『周易內傳』卷一上、七四頁）

凡そ卦は象を物理人事に取る者有り、而るに乾坤獨り德を以て名を立つるは、天下の事物を盡くせども、此の純陽純陰を象る者有る無ければなり。陰陽二氣、宇宙に絪縕し、萬彙に融結し、相離れず、相勝たず、陽有りて陰無く、陰有りて陽無きこと無く、地有りて天無く、天有りて地無きこと無し。故に周易は乾坤を竝建して諸卦の統宗と爲し、孤り立たざるなり。然れども陽は獨り運ぐるの神有り、陰は自ら立つの體有り、天は地中に入り、地は天化を函みて、抑も各の其の功能を效す。

王夫之において卦は宇宙自然と人間世界からその象を取ったものであるが、純陽純陰の乾坤のように孤立した陰と陽の象が實在するわけではない。一つの卦としての乾坤は只だ宇宙自然における盛んなる陰陽各々の働きを擧げたものに過ぎないが、『周易』がその純陽純陰の乾坤二卦を始めとしたのは、陰陽二氣による宇宙自然の變化原理を明確に表すためであり、他の六十二卦の變化もその乾坤二卦に基づいていると、王氏は考えるのである[39]。

然陰陽非有偏至之時、剛柔非有偏成之物。故周易之序、錯綜相比、

合二卦以著幽明屈伸之一致。乾坤竝立、屯蒙交運、合異於同、而經緯備。大小險易得失之幾、互觀而益顯。乾坤者、錯以相應也。屯蒙者、綜以相報也。此周易之大綱、以盡陰陽之用者也。餘卦放此。（『周易內傳』卷一上、七四頁）

然れども陰陽は偏り至るの時有るに非ず、剛柔は偏り成るの物有るに非ず。故に周易の序は、錯綜相比し、二卦を合して以て幽明屈伸の一致を著わす。乾坤竝立し、屯蒙交運し、異を同に合して、經緯備わる。大小險易得失の幾、互いに觀て益々顯わる。乾坤なる者は、錯して以て相應ずるなり。屯蒙なる者は、綜して以て相報ゆるなり。此れ周易の大綱にして、以て陰陽の用を盡くす者なり。餘卦此れに放う。

王夫之は陰陽二氣による易の原理は必ず對になる二つの卦から現れるので、六十四卦が錯と綜の關係で配列されているとする。つまり、對になる兩卦は乾䷀・坤䷁のような錯の關係であったり、または屯䷂・蒙䷃のような綜の關係であって、そのような錯綜の關係は陰陽二氣の働きを明らかに表す『周易』の要であるとする。このように錯綜說は乾坤竝建論の根幹をなす重要理論である。王氏はこうした乾坤竝建論と錯綜說の關係を次のように體用に譬えて說明する。

周易之書、乾坤竝建以爲首、易之體也。六十二卦錯綜乎三十四象而交列焉、易之用也。純乾純坤、未有易也。而相峙以竝立、則易之道在。而立乎至足者爲易之資。屯蒙以下、或錯而幽明易其位、或綜而往復易其幾、互相易於六位之中、則天道之變化人事之通塞盡焉。（『周易內傳』卷一上、四一頁）

周易の書、乾坤竝建して以て首めと爲すは、易の體なり。六十二卦三十四象に錯綜して交列するは、易の用なり。純乾純坤、未だ易わる有らざるなり。而るに相峙して以て竝立すれば、則ち易の道在り。而して至足する者（乾坤）を立てて易の資と爲す。屯蒙以下、或いは錯して幽明其の位を易え、或いは綜して往復其の幾を易え、互いに六位の中に相易われば、則ち天道の變化・人事の通塞焉に盡くさる。

このように乾坤竝建論を支えているのが錯綜說である。王夫之は乾坤二卦を『周易』の始めとして乾坤竝建の原理を表し、他の六十二卦の配列を通じて錯綜の原理を表したことを『周易』成立における文王の功績として高く評價する。[40]

伏羲以八卦生六十四卦、而文王統之於乾坤之竝建、則尤以發先聖之藏。然說卦傳言參天兩地・觀變於陰陽、則亦乾坤統全易之旨。但伏羲有卦而無辭、故其統宗不著。文王既爲之辭、又爲之序、以申其固有之理、終不可謂伏羲之別有序位、爲先天之易也。（『周易內傳』卷六下、六一九頁）

伏羲は八卦を以て六十四卦を生じ、而して文王之を乾坤の竝建に統ぶるは、則ち尤も以て先聖の藏を發す。然れども說卦傳の「天を參にし地を兩にす」・「變を陰陽に觀る」と言うは、則ち亦た乾坤全易を統ぶるの旨なり。但し伏羲に卦有りて辭無し、故に其の統宗著れず。文王既に之が辭を爲り、又た之が序を爲して、以て其の固有の理を申ぶれば、終に伏羲の別に序位有りて、先天の易と爲すと謂う可からざるなり。

王夫之は文王の乾坤竝建と錯綜が伏羲の卦制作の原理をそのまま表したものに過ぎないので、伏羲易を文王易と區別して先天の易とすることはできないと考える。このように乾坤竝建論と密接に關わっている王夫之の錯綜說は、王氏の易學成立過程において早い段階で確立し

たものである。王氏の初期著作である『周易稗疏』は繫辭傳の「參伍錯綜」をすでに錯綜說に基づいて解說している。

錯者、鑪金之械器、汰去其外而發見其中者也。綜者、繫經之線、以機動之、一上而一下也。卦各有六陰六陽、陰見則陽隱於中、陽見則陰隱於中。錯去其所見之陰則陽見、錯去其所見之陽則陰見。如乾之與坤、屯之與鼎、蒙之與革之類、皆錯也。就所見之爻、上下交易、若織之提綜、迭相升降。如屯之與蒙五十六卦皆綜也。舊未注明、不知此乃讀易之要不可忽者也。（卷三、七八八頁）

錯なる者は、金を鑪（みが）くの械器（やすり）にして、其の外を汰（あら）い去りて其の中を發見する者なり。綜なる者は、經の線に繫け、機を以て之を動かし、一たび上りて一たび下るなり。卦は各の六陰六陽有り、陰見わるれば則ち陽中に隱れ、陽見わるれば則ち陰中に隱る。其の見わるる所の陰を錯去すれば則ち陽見われ、其の見わるる所の陽を錯去すれば則ち陰見わる。乾と坤、屯と鼎、蒙と革の如きの類は、皆な錯なり。就（も）し見わるる所の爻、上下交易すれば、織の提綜して、迭いに相升降するが若し。屯と蒙の如きの五十六卦皆な綜なり。舊未だ注明せざるは、此れ乃ち讀易の要にして忽がせにすべからざる者なるを知らざればなり。

これまでの考察からわかるように、來王兩氏の錯綜說には相通じるところが多い。例えば、「おさの働き」から上下反對の綜の意味を取り出し、また、錯綜說を文王の六十四卦の配列原理とし、先天易批判の根據とする點などが兩氏の類似點として擧げられる。但し、錯に訓詁を付けて「やすり」から陰陽反對の意味を引き出したのは王氏による新解釋であり、王氏の先天易批判は來氏よりもう一步突き詰めたもののように見える。來氏の先天易批判が先天・後天の區分のみを問題視し伏羲易と文王易の區別は未だ認めているのに對して、王氏の先天易批判は、伏羲易と文王易の區別も認めないのである。王氏易學におけるもう一つの命題である「四聖一揆」からも、そうした態度が窺える。こうした兩氏の相違點は、來氏の錯綜說の不備を王氏が補ったものと見なすことも可能ではある。しかし、王夫之は錯綜の原理を未だ誰も明らかにしたことのないものとし、自身のどの著作においても來知德の名を擧げてはいない。そのため、來王兩氏の思想的影響關係を論定することは容易ではない。

しかも、兩氏の錯綜說はその展開において相異なる樣相を見せる。來知德の錯綜說は主に陰陽の對待と流行を表すものであるが、王夫之の錯綜說は陰陽二氣の不可分の關係を强調するもので、そのために王夫之において乾坤竝建論の主要根據となるのである。また、來知德は錯綜の原理を易經文の解釋に積極的に用いたが、王夫之は錯綜をただ卦の配列原理として理解するのみで、易經文の解釋においては用いない。また、來知德は錯綜を伏羲圖と文王圖の原理としても用いたのに對して、王夫之はそうしない。それは王氏が河圖だけを易の原理を表したものと認め、京房や邵雍などの圖說を易とは關わりの無いものとするためである。[41] 兩氏の相異點において最も興味を引くのは、序卦傳に對する評價であろう。

上述のように、兩氏の錯綜說において文王の卦序は重要な根據となるが、その卦序に基づく序卦傳については兩氏の評價が相異なる。それは序卦傳に對する兩氏の見方の相違に由來する。上述のように、來知德は序卦傳の論理に拘らずその卦序の象に注目して序卦傳を錯綜の原理を表した聖人の書として高く評價するのに對して、王夫之は他の傳と同じくその論理に注目して、すべての卦を先後の關係で繫げてい

く序卦傳の論理展開を牽強付會に過ぎないとし、[42]「序卦傳は聖人の書に非ず」と批判したのである。[43] 王氏においてそうした序卦傳の論理は陰陽二氣の不可分・無先後の關係を強調する乾坤竝建説とは相い容れないものであるからである。そのために王夫之は晩年の著作である『周易内傳』においては序卦傳に注を付けずに原文のみを載せて、專ら雜卦傳を以て錯綜の原理を説くのである。[44]

おわりに

本稿は近世易學史における來知德の錯綜説の意義について考察し、それに加えて王夫之易學における錯綜説との比較も試みた。錯綜説とは、象を第一原理とし『周易』成立における文王の役割に着目して、その卦辭と卦序に共通する原理として來知德が創案したものである。來知德の錯綜説には漢易の「旁通」説・孔穎達の「非覆卽變」説・「上下經各十八卦」説・朱熹の「錯綜」説の影響が見られる。しかし、その錯綜説に基づいて新しい易解釋を試みながら、『周易』における陰陽の對待と流行の原理に結び付けて伏羲の先天易と文王の後天易の統一を圖ったことは、易學史における來知德の功績として評價できると考えられる。

王夫之の乾坤竝建論は『周易』における陰陽二氣の不可分・無先後の關係を强調するものであり、その乾坤竝建論の基盤となるのが文王の卦序に基づき對になる兩卦の緊密な關係を强調した錯綜説である。また、來王兩氏の錯綜説には相通じるところが多いが、兩氏の易論展開においては序卦傳に對する評價のように相異なる部分もあることが明らかになった。

最後に指摘して置きたいのは、そうした相異點を有するにもかかわらず、來王兩氏の思想的影響の可能性は再考に値するということである。序卦傳に對する兩氏の相反する評價は易學史の觀點からみる必要がある。序卦傳に對する來知德の高い評價が韓康伯以來の序卦傳批判を意識して成立したものであるように、王夫之の序卦傳批判も前代に存在していたであろう高い評價を意識して成立したものであり、その高い評價の例として來知德が最も有力な候補であると考えられる。しかし、兩氏の影響關係を斷定するに當たって最も問題となるのは「王夫之が來知德の易解釋を讀んでいたのか否かの事實關係」であろう。それの解明は、王夫之の讀書環境や思想形成などについての更なる考察が必要であり、今後の課題としたい。

注

(1) 本稿で用いた『周易集注』は『易經集注』(上海書店、一九八八年影印康熙崔華寶廉堂刊本)である。書名については、來知德が自序において「周易集注」と言明しているので、本稿ではそれに從う。吳偉明氏は江戸時代に重印された『易經集注』を來知德の著作とするが(『易學對德川日本的影響』、中文大學出版社、二〇〇九年、二〇六頁)、それは「程朱傳義」であり、管見によれば、江戸時代に來氏の『周易集注』が重印されたことはない。

(2) 『周易集注』四庫提要「知德自鄉擧之後、卽移居萬縣深山中、精思易理。自隆慶庚午至萬歷戊戌、閱二十九年而成此書。其立説專取繫辭中錯綜其數以論易象、而以雜卦治之」。

(3) 近世中國における來知德易學の影響については、廖名春共著『周易研究史』(湖南出版社、一九九一年)三五五頁を參照。その一例として、焦循の相錯説はそれの影響を受けた代表的なものである。朝鮮後期にお

けるその影響を窺える代表的な例としては、第二十二代國王正祖の一七八三年と一七八四年の經史講義において、來知德の易解釋が引用されたことや、朝鮮後期の大儒、茶山丁若鏞（一七六二～一八三六）が「來氏易註駁」（『易學緒言』）において來知德の易學について詳しく論じながら批判したことを擧げられる。それに關する韓國の研究は、방인（バン・イン）「茶山의 明淸易學 批判」（『哲學研究』八四集、大韓哲學會、二〇〇二年）、김영우（キム・ヨンウ）「조선 후기 래지덕 역학의 수용과 비판（朝鮮後期における來知德易學の受容と批判）」（『人文論叢』第七二卷第一號、二〇一五年）、「다산 정약용의 내지덕 역학 비판（茶山丁若鏞の來知德易學批判）」（『茶山學』二六號、二〇一五年）を參照。日本におけるその影響については、濱久雄の「明代における來知德の易學とその影響」（『東洋研究』一八六號、二〇一二年。『東洋易學思想論攷』（明德出版社、二〇一六年）に再錄）を參照。濱久雄氏も指摘したように、明治時代に活躍した根本通明は「讀易私記」の中で來知德の易學を最も高く評價している。

（4）『周易內傳發例』二十五章（二八三頁）「以乾坤竝建爲宗、錯綜合一爲象」。本稿で用いた王夫之の周易關連著作は『船山全書』（嶽麓書社、一九八八年）の第一册と第十二册である。以下頁數のみを記す。

（5）高田淳『易のはなし』（岩波新書、一九八八年）一二五頁。

（6）朱伯崑『易學哲學史』第四卷（崑崙出版社、二〇〇五年）一〇三頁。

（7）『周易集注』易經字義・象「朱子語錄云、卦要看得親切、須是兼象看、但象失其傳了。『朱子語類』卷六六第八一條（中華書局、一九八六年、以下同、一六四三頁）「卦中要看得親切、須是兼象看、但象不傳了」。（劉礪錄）。

（8）『周易正義』卷九、序卦傳「今驗六十四卦、二二相耦、非覆卽變。覆者、表裏視之、遂成兩卦、屯蒙需訟師比之類、是也。變者、反覆唯成一卦、則變以對之、乾坤坎離大過頤中孚小過之類、是也」。

（9）『周易集注』卷七、恆卦の注「蓋咸、少男在少女之下、以男下女、乃男女交感之義。恆、長男在長女之上、男尊女卑、乃夫婦居室之常。論交感之情、則少爲親切、論尊卑之序、則長當謹嚴、所以次咸」。

（10）『周易正義』卷九「天地定位」條の疏。

（11）『周易本義』說卦傳「八卦相錯」の注「邵子曰、此伏羲八卦之位。乾南、坤北、離東、坎西、兌居東南、震居東北、巽居西南、艮居西北。於是八卦相交而成六十四卦、所謂先天之學也」。

（12）『周易集注』四庫提要「然上下經各十八卦、本稅與權之舊說」。

（13）『易學啓蒙小傳』四庫提要を參照。

（14）『六經圖』（民國七七年重印本）には總七〇個の易圖が收錄されている。最初の「易有太極圖二」の一つが周敦頤の太極圖であるが、その圖は朱熹所定圖ではなく、朱震（字子發、一〇七二～一一三八）所進圖（『漢上易傳』）を採用しており、易學の傳授過程を圖表にした最後の「古今易學傳授圖」が二程で終わっている。これらのことからも、『六經圖』の易圖が朱子学誕生以前のものであることがわかる。周子太極圖における朱熹所定圖と朱震所進圖については今井宇三郎『宋代易學の研究』（明治圖書出版、一九六三年）第四章「太極圖考（二）」を參照。

（15）その圖說の一例を擧げると、邵子曰、八卦之象、不易者四、反易者二、以六卦變而成八也。（稅與權注：不易者四、謂乾坤坎離也。反易者二、謂震巽艮兌也。體有八而用則六、卦有八而爻則六。此造化之端倪、皆出自然耳。）重卦之象、不易者八、反易者二十八、以三十六變而成六十四也」。

（16）注（6）前揭書第三卷、三三一頁。筮法としての錯綜については『朱子語類』卷七五第五一條（林學蒙錄、一九二一頁）を參照。

（17）漢代の象數易で用いられた旁通などの諸技法については、鈴木由次郎

『漢易研究』（明德出版社、一九六三年、以下同）第二部第二章「象數易の展開」を參照されたい。

（18）『周易本義』說卦傳「艮爲山」條の注「荀九家有爲鼻爲虎爲狐」。

（19）『周易集注』卷三、履卦「履虎尾、不咥人、亨」の注「下卦兌錯艮、艮爲虎、虎之象也。乃兌爲虎、非乾爲虎也。先儒不知象、所以以乾爲虎。周公因文王取此象、故革卦上體兌亦取虎象。曰尾者、因下卦錯虎所履在下、故言尾也。故遯卦下體艮亦曰尾」。

（20）『周易集注』卷八、睽卦上九「睽孤、見豕負塗、載鬼一車、先張之弧、後說之弧、匪寇婚媾、往遇雨則吉」の注「離錯坎、坎爲豕、又爲水、豕負塗之象也。坎爲隱伏載鬼之象也。又爲弓、又爲狐疑、張弓說弓心狐疑不定之象也。變震爲歸妹、男悅女、女悅男、婚媾之象也。寇指九二九四、又坎爲雨、雨之象也。遇雨者、遇六三也、雨則三之象也。三居澤之上、乃雨也」。

（21）『周易集注』卷三、師卦九二「在師中吉、无咎、王三錫命」の注「本卦錯同人、乾在上、王之象、離在下、三之象、中爻巽、錫命之象、全以錯卦取象、亦如睽卦上九之見豕負塗也。取象如此玄妙、所以後儒難得知」。

（22）『周易集解』卷一、乾卦文言傳「六爻發揮、旁通情也」の注「陸績曰、乾六爻發揮變動、旁通于坤、坤來入乾、以成六十四卦、故曰旁通情也」。

（23）『周易集注』卷四、豫卦初六「鳴豫、凶」の注「謙豫二卦同體、文王綜爲一卦、故雜卦曰、謙輕而豫怠也。謙之上六卽豫之初六、故二爻皆言鳴」。謙上六「鳴謙、利用行師、征邑國」。

（24）『周易集注』卷十二、未濟九四「貞吉悔亡、震用伐鬼方、三年有賞于大國」の注「未濟與既濟相綜、未濟九四卽既濟九三、故爻辭同。亦如損益相綜、損之六五卽益之六二、夬姤相綜、夬之九四卽姤之九三、所以爻辭皆同也。綜卦之妙至此」。

（25）來知德は既濟九三と未濟九四が屬する坎☵を用いて、鬼方を北方國と解釋する。『周易集注』卷十二、既濟九三「高宗伐鬼方、三年克之、小人勿用」の注、「鬼方者、北方國也。（中略）坎居北、故曰鬼方」。

（26）注（17）前揭書、二七九頁。

（27）『周易集注』四庫提要「其自序乃高自位置、至謂孔子沒後而易亡、二千年有如長夜、豈非伏處村塾、不盡覩遺文祕籍之傳、不盡聞老師宿儒之論。師心自悟、偶有所得、遽夜郎自大哉」。

（28）『朱子語類』卷六六第一九條（一六三〇頁）「又曰、文王之心、已自不如伏羲寬闊、急要說出來。孔子之心、不如文王之心寬大、又急要說出道理來。所以本意浸失、都不顧元初聖人畫卦之意、只認各人自說一副當道理」。（沈僩錄）。『周易本義』易圖、「有天地自然之易、有伏羲之易、有文王・周公之易、有孔子之易。自伏羲以上、皆无文字、只有圖畫、最宜深玩、可見作易本原精微之意。文王以下、方有文字、卽今之周易」。朱熹の先天易理解については、三浦國雄「朱晦庵と『易』―その卜筮說をめぐって」（『東方學報・京都』第五十五册、一九八三年）を參照されたい。

（29）『周易本義』說卦傳「帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、說言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮」條の注「邵子曰、此卦位乃文王所定、所謂後天之學也。（中略）右第五章、此章所推卦位之說、多未詳者」。『朱子語類』においても、先天圖を說いた例の數（二三條）に比べて、後天圖を說いた例は極めて少ない。

（30）朱熹は流行の變易を錯綜・用とも言い、對待の交易を相對・體とも言う。『朱子語類』卷六五第七條（一六〇三頁）「陰陽、有相對而言者、如東陽西陰、南陽北陰是也、有錯綜而言者、如晝夜寒暑、一箇橫一箇直是也。（中略）對待底是體、流行底是用、體靜而用動」。（程端蒙錄）。『朱子語類』における變易と交易の用例については、『朱子語類』卷六十五の譯注（その一）」（『中國哲學』第四十號、北海道中國哲學會、二〇一

三年）二七一頁の表を參照。

(31)『周易集注』卷一「周易上經」の注「以易名書者、以字之義有交易變易之義。交易以對待言、如天氣下降以交于地、地氣上騰以交于天也。變易以流行言、如陽極則變陰、陰極則變陽也。陰陽之理、非交易則變易、故以易名之」。

(32)『周易集注』「伏羲八卦方位之圖」の圖說「此伏羲之易也。易之數也對待不移者也。故伏羲圓圖皆相錯以其對待也。所以上經首乾坤、乾坤之兩列者對待也。孔子繫辭天尊地卑一條、蓋本諸此」。

(33)『朱子語類』卷六十五第二二條（一六〇五頁）「問易有交易變易之義如何。曰交易是陽交於陰、陰交於陽、是卦圖上底。如天地定位、山澤通氣云云者是也。變易是陽變陰、陰變陽、老陽變爲少陰、老陰變爲少陽、此是占筮之法。如晝夜寒暑、屈伸往來者是也」。（呂燾錄）。

(34)『周易集注』卷一五、說卦傳「神也者妙萬物」條の注「先儒不知對待流行、而倡爲先天後天之說。所以本義于此二節、皆云未詳。殊不知二圖分不得先後。譬如天之與地對待也、二氣交感、生成萬物者流行也、天地有先後哉。男之與女對待也、二氣交感、生成男女者流行也、男女有先後哉。所以伏羲文王之圖、不可廢一。孔子所以發二聖千載之祕者此也。此節乃總括上四節、二圖不可廢一之意、所以先儒未詳其義」。

(35)『周易集注』圓圖の圖說「蓋伏羲之圖、易之對待、文王之圖、易之流行、而德之圖不立文字、以天地間理氣象數不過如此。此則兼對待・流行・主宰之理而圖之也。故圖于伏羲文王之前」。來知德のもう一つの著作である『日錄』では、その圖を「太極圖」と題する（『重刻來瞿唐先生日錄』卷一、弄圓篇）。

(36)『周易集注』卷一五、雜卦傳の注「雜卦者、雜亂文王之序卦也。（中略）又恐後學以序卦爲定理、不知其中有錯有綜、有此二體、故雜亂其卦。前者居于後、後者居于前、止將二體兩卦有錯有綜者下釋其意、故乾剛坤柔、比樂師憂是也。使非有此雜卦、象必失其傳矣」。

(37)『周易集注』卷一五、序卦傳の注「序卦者、孔子因文王之序卦、就此一端之理以序之也。（中略）宋儒不知象、就說序卦非聖人之書、又說非聖人之蘊、非聖人之精。殊不知序卦非爲理設、乃爲象設也。如井蹇解無妄等卦辭、使非序卦雜卦、則不知文王之言何自而來也。自孔子沒、歷秦漢至今日、叛經者皆因不知序卦雜卦也。以此觀之、謂序卦爲聖人之至精可也」。『朱子語類』卷第七七第六五條（一九七五頁）「問、序卦或以爲非聖人之書、信乎。曰、此沙隨程氏之說也。先儒以爲非聖人之蘊、某以爲謂之非聖人之精則可、謂非易之蘊則不可」。（黃榦錄）。『周易正義』卷九、序卦傳「韓康伯云、序卦之所明、非易之緼也。蓋因卦之次、託象以明義」。序卦傳に對する批判は韓康伯に由來するが、韓氏の「託象以明義」說は來氏の「序卦非爲理設、乃爲象設」と相通じると考えられる。

(38)『明史』來知德傳（中華書局、七二九一頁）。

(39)『周易內傳』卷一上（四三頁）「周易竝建乾坤爲太始、以陰陽至足者統六十二卦之變通」。

(40)注（6）前揭書第四卷、六九―七〇頁。

(41)『周易內傳發例』六章（六五五頁）「河圖者、聖人作易畫卦之所取、則孔子明言之矣。則八卦之奇耦配合、必卽河圖之象、聖人會其通、盡其變、以紀天地之化理也、明甚」。同二十五章（六八三頁）「畏文周孔子之正訓、闢京房陳摶日者黃冠之圖說爲防」。王夫之の圖書理解については、本間次彥「河圖洛書の問題圈―圖・象數・王夫之」（『東方學』第八十一輯、一九九一年）を參照。

(42)『周易內傳』卷六下（六三八頁）「（序卦傳）二篇必非聖人之書、卽以文義求之、亦多牽强失理、讀者自當辨之。餘詳外傳」。

(43)『周易外傳』卷七（一〇九一頁）「序卦非聖人之書也。乾坤竝建而捷立、周易以始、蓋陰陽之往來無淹待而嚮背無吝留矣」。王夫之の乾坤竝建論

に基づく序卦傳の批判についてはすでに詳しい先行研究がある。高田淳「王船山の乾坤竝建捷立論—序卦は聖人の書に非ず」（『研究年報』三三、學習院大學、一九八六年）。

（44）『周易內傳』卷六下（六三八頁）「雜者相閒之謂也。一彼一此、一往一復、陰陽互建而道義之門啓焉。故自伏羲始畫、而卽以相雜者爲變易之體。文王因之而以錯綜相比爲其序、屯蒙以下四十八卦、二十四象往復順逆之所成也。（中略）周易以綜爲主、不可綜而後從錯。（中略）故略於錯而專於綜、實則錯綜皆雜也。錯者幽明之迭用、綜皆用其明者也。周易六十四卦爲三十二對耦之旨也、而傳爲言其性情功效之別焉」